

二一世紀に向かって、人民革命勝利の時代を切りひらこう！

五・三〇リッダ闘争二〇周年にあたって

日本赤軍

一

「国境を越えたたたかいは、日本革命を保証し、日本革命は世界の人民戦争を押し進める。日本の友人達、行動と犠牲の上に雄雄しく燃えている革命の歴史を継承し、世界の友人と共に進め！隊伍を整えよ、敵は一つだ。我々は日本人の誇りをもってパレスチナ人民と戦争に行く。葬列を繰り出すな。ただ祭り、我々と世界革命の友人達のために。」という言葉を残してたたかい尽くしたリッダ戦士たち、そしてリッダ闘争に対するイスラエルの報復の犠牲になったガッサン・カナファーニ同志をはじめとするパレスチナの同志たち、二〇年経ちました。同志たちに見守られ、支えられ、わたしたちはたたかいを継続し発展させることができました。当時、生まれたパレスチナの子供たちも二〇歳の立派な革命戦士になって戦場を走り回っています。

獄中でたたかい抜いている同志たち！

共に二〇周年の祭を祝えない無念さを思います。わたしたちのたたかいは確実に前進しています。場所は引き離されていても、二〇周年の志をひとつにし、ともに前進しよう！

日本人、同志、友人のみならず！

リッダ闘争二〇周年に際して、日本赤軍全兵士の名においてアラブの地から固いたたたかいの意志をもって熱い連帯の挨拶をおくりします。

二〇年前、リッダ闘争はパレスチナの人々のみならず、アラブ諸国人民に歓喜をもって迎えられました。イスラエル・シオニストに神聖な地を奪われ、領土を踏みじられ、生まれ育った地から追い出されたパレスチナ人民のみならず、アラブ人民全体が、イスラエルの中心で、アジアの東の果てから来た日本人戦士が決死のたたかいをやりぬいたことに喝采をおくりました。「リッダ戦士に続け！」が当時のパレスチナ戦士たちの合言葉でした。

リッダ闘争の意義は、第一に、決死の自己犠牲的な闘争実践をもって、国際連帯をきりひらいたことにあります。ベトナム人民を先頭とする反帝国主義勢力の前進の中で、「第二、第三のベトナムを！」を合言葉に、帝国主義を追いつめるたたかいが第三世界を中心に前進していました。わたしたちは「連帯は、ローマの市民と剣闘士の関係であってはならない」とゲバラの言葉を実践することを通して、国際主義の地平を發展させようとなりました。それが、反帝国主義の勢力の国際的な結合を強化し、前進させるものでした。また、このたたかいは、日本人とパレスチナ人民の国際連帯の基礎をつくりだしました。

第二に、連合赤軍問題の克服の方向など日本の革命運動への身をもつての問題提起でした。連合赤軍のニュースを聞きながら、無念の涙を流した戦士たちは、同志のかけがえのなさを噛みしめ、その誤りを乗り越えて行くためには、自分たちの生命を賭してたたかい抜くしかないとの決意を固め、作戦にむかいました。このたたかいによって、人民のために、自らを犠牲にしてたたかうことこそが連赤の敗北をのりこえるものであることを訴えたのです。

一一

リッダ闘争にはじまる二〇年のたたかいは、自己犠牲と国際主義の精神を継承し、発展させるものとしてありました。

この二〇年間、わたしたちが身をおいている国際情勢も大きく変わりました。七〇年代においては、国際反帝勢力の前進と高揚の時代として、八〇年代は、帝国主義の反撃による困難な情勢を切り開く時代としてあり、八〇年代末のソ連と東欧の社会主義諸国の崩壊は、九〇年代の反帝勢力のたたかいかたを問うています。

こうした国際情勢の流れのなかで、わたしたちは、国際主義の実践を通して、国際的な反帝勢力の統一と日本革命の前進を、共に担うたたかいを進めてきました。

七〇年代においては、リッダ闘争につづいて、七三年日航機ハイジャック闘争、七四年のシンガポール石油精製所攻撃、さらにハーグ同志奪還闘争として国際遊撃戦をパレスチナ革命勢力などとともにたたかいました。それは、国際共同闘争を通して、反帝戦線の統一をめざしたものでした。

たたかひの前進にも拘らず、七五年のスウェーデンでの二同志の被逮捕・自供という敗北は、リッダ闘争の国際主義と自己犠牲の精神を継承し、たたかっているという自分達の思いをも含めてとらえ返しを要

求しました。

リッダ闘争以降、わたしたちは、戦士としてのモラルに支えられた戦闘団としての「強さ」に依存して武装闘争をたたかってきました。わたしたちが直面した事態は、その団結の質のとらえ返しを要求するものでした。団結の質を規定している自分たちの革命と人民に対する態度を問い合い、その中で自分がどうたたかうのか、自分がどう生きるかということでしたかたかかっていないことに気づきました。そして、その実体を変えるための思想闘争を開始したのです。また、わたしたちは思想闘争を通して自己批判の重要性を学びました。失敗や敗北をだれかの責任や外因のせいにしたりすることが、対立や分裂になり、それはまた、主体的な変革を阻害してきたことに気づきました。素朴であるが、本質的な問題としてある自己批判の立場に立つときに、失敗や敗北はより団結をふかめ、たたかひを発展させることができるということとを学びました。

わたしたちは、この地平にたつたたたかひを継続しました。その最初の闘争は、クアラルンプール同志奪還闘争として結実し、わたしたちの同志だけではなく、連合赤軍、東アジア反日武装戦線、赤軍派の同志を含めて奪還しました。これは、わたしたちの敗北にとどまらず、彼らの敗北を共に克服しようという呼びかけであり、わたしたちの自己批判でもありました。

この闘争の勝利による新たな同志の結集とその敗北のとらえ返しは、七七年五・三〇声明「団結をめざし、団結をもとめ、団結を武器としよう」で提起した総括に結実しました。連赤にしる、東アジアにしる、わたしたちの敗北と共通する思想的な根拠をもってこれを総括し、それを共通の出発点とすることができました。

わたしたちは、この過程で、ヨルダンでの日高同志虐殺、奥平同志の日本への強制送還という事態に直面し、この敗北を克服するためにダッカ闘争をたたかいました。この闘争においても、わたしたちの同志

たちだけではなく、東アジア反日武装戦線、赤軍派、また、一般刑事犯の人たちも奪還しました。これについては、当時からブルジョア・マスコミや一部の左翼の人たちからも犯罪者を奪還したということではないと非難されてきました。しかし、わたしたちの意図は、この人々が獄中で人間としてたたかいは開始したことに応えることにありました。このダッカ闘争で結集した同志たちとも、敗北を総括し、共有するなかで、共通の思想的な立場から出発することをかち取りました。

三

わたしたちは、この思想的な立場からの国際的なたかいと同時に、七七年五・三〇声明の地平から日本人のたたかいと新たな結びつきを開始しました。この声明は、これまでのわたしたちを支援し、共に歩いていた人々とは違う人々との結びつきを広げました。

国際的には、反帝国主義のたたかいの高揚の時期であり、各国の革命勢力がパレスチナ戦場に結集しており、わたしたちの国際的な共同は拡大しました。これは、わたしたちに、各国の革命の教訓を学ぶ機会を与え、さらに、反帝の国際戦線の形成の条件を煮つめました。

こうした前進の側面と同時に、わたしたちの自己革命のたたかいは、新たな問題に直面し、その克服が問われました。それは、思想闘争が観念化し、組織変革と結びつかず、個人の変革にとどまり、それが実践上の問題として現れたのです。また、日本の運動との関係においても、運動を統一する普遍的なものへと、わたしたちの獲得した地平を発展させることが不十分な状態にありました。それが旧来わたしたちを支持し共同していた人々と新たな地平に結集した人々との間での結合を阻害することになっていました。

この克服のために、わたしたちは、日本共産主義運動総括を通して、自分たち自身の思想的な地平を対象化し、さらに、路線的なとらえ返しを行いました。そして、これまでの党のあり方が人民と党の関係に

おいて、党が主体となり、革命主体であるはずの人民がそれに従うものになっている現実をとらえ返ししました。その根拠として「党が普遍性を体現し、人民を指導する」という党観そのものに根本問題があることを総括しました。党は、階級の一部であり、党は不断に自らを実践の中で変革しなければならぬ、党の総括、党の革命こそ党の立脚点としなければならぬということです。それは、人民が生きるための原理である自らを変革することによって、目的意識的に、集団的に現在を変革するというあり方を党の出発点にするということです。そして、党の役割は、人民が自然発生的なたたかいのなかで準備できないものを援助することであり、そのために、党は、人民のたたかいの統一、国際主義、そして、人民の政治的軍事的力量の相対的独自の準備を行うことにありと総括したのです。

わたしたちは、この地平から国内に向かっては小雑誌の発行を開始し、わたしたちが獲得した地平を返し、日本のたたかいの発展をつくりだすことを目指しました。国際的には、八〇年のレーガン政権の登場により反帝勢力の前進に対する暴力的な巻き返しはじまり、核戦争の危険性が高まり、わたしたちも反核平和運動の重要性を認識し、国際的な平和運動の発展を支援する立場をとりました。

このたたかいの途上で、八二年のイスラエルによるベイルート侵略が始まりました。わたしたちは、パレスチナ革命勢力、レバノン民族主義勢力とともにシオニストの包囲に対してたたかひを挑みました。しかし、パレスチナ革命のベイルート撤退と共に、根拠地であったベイルートの喪失で、新たなたたかひが問われました。わたしたちは、この敗北を通して、日本のたたかひの支援を自らの重点とする分、足元である国際的なたたかひの位置を軽視する傾向にあったことをとらえ返しました。なぜなら、ベイルートの喪失がパレスチナ革命の根拠地の一つの喪失だけでなく、国際的な革命勢力の根拠地の喪失でもあったからです。現在から振り返ると反帝勢力の後退の最初の転換点であったといえるでしょう。それは、パレスチナ革命にとどまらず、国際的な反帝勢力のたたかひを困難にしています。

わたしたちは、この困難な情勢を国際的な反帝勢力とともに切り開くたたかいを重視し、そして、その前進をもって、国内の人民のたたかいを支えていくという立場に立ちました。その立場から国際反帝勢力との共同と自力更生のたたかいを前進させました。これは、反帝勢力の実践共同とその相互支援をもって、攻勢を開始した帝国主義に対するたたかいの強化を目指すものとしてありました。このたたかいは、七〇年代の国際共同よりも広範なものへと発展しました。

この前進は、八五年のパレスチナ革命による岡本同志奪還としても結実しました。これまでも、パレスチナの闘争での釈放要求において、岡本同志は要求の一番目におかれていました。つねにシオニストは拒否し、岡本同志の奪還を阻んできましたが、ついに八五年のガリリー作戦によって、多くのパレスチナ革命の戦士たちとともに、岡本同志がわたしたちのところに戻ってきました。パレスチナ革命による岡本同志奪還は、改めて国際主義のたたかいの意義をわたしたちに実感させ、また、パレスチナ革命への感謝と前進への決意を固めさせました。

四

この国際的なたたかいは、わたしたちに多くの教訓を与え、日本人民のたたかいへの支援の地平をも前進させました。

わたしたちは、日本革命の勝利を導く五つの戦略的な観点をそのなかで獲得してきました。第一には、主導性の観点です。現代の革命は、危機や戦争を待機する受動的な革命ではなく、現在からの建設のたたかいであり、また、敵を包囲するたたかいであるということです。第二には、思想的結束の観点です。これは、人民のたたかいの統一の統一を重視し、また、そこでの思想的な結束を重視する観点です。これは、人民のたたかいの統一の質的な発展を重視することで、そこにつくりだすべき社会の姿をつくりあげていくこと

とです。第三に陣地戦の観点です。これは革命を勝利させるためには、味方の陣地を現在の社会の中でひとつひとつ拡大することによって、敵を包囲するという観点です。現代の革命は、レーニンの時代のような、敵の危機に対しての一挙的な蜂起による勝利ではなく、新たな社会の基盤を建設し、それを陣地として拡大することが勝利の要であることを教えています。第四には、ゲリラ戦の観点です。これは軍事的な意味だけではなく、たたかい方としても、敵の力を弱いところからはじめて、自らの力を形成し、そのたたかいにおいて敵を打ち倒すことであり、また、常に敵に対して主導性をもってたたかうことです。第五には、国際主義の観点です。日本のたたかいを国際的な階級闘争の一部として位置づけてたたかい、同時に、日本革命を国際的に孤立させないようにたたかうということです。

これらの観点をもつことによって、日本人民のたたかいへの支援自身をより戦略的方向へすすめることができました。

八七年、任務の途上にあつた同志が逮捕されました。それを契機とする日本警察権力の再編が行われ、日本警察は、アメリカ帝国主義の後押しをうけつつ、国際的展開を開始しました。これは、わたしたちのたたかいの前進に脅威を感じた日本支配階級の本格的な攻勢を意味していました。

国際情勢的にも、ソ連のゴルバチョフの登場と「新思考」外交による帝国主義との協調路線は、反帝国主義勢力、諸国を困難な状況においてきました。ゴルバチョフは、それ以前のソ連の指導者と違い、帝国主義に対してたたかおうとする勢力、諸国に対して、帝国主義との協調への圧力をかけ、また、たたかいへの支援をしないことで、帝国主義と対峙する勢力、諸国を裸で帝国主義の毒牙のまえにさらすことになったのです。

また、それは、武装闘争による解放をかちとろうとする勢力を「テロリスト」として否定する国際的な環境をつくりだし、帝国主義の策動を助けることになりました。他方で、帝国主義は、グレナダへの侵略、

リビアへの爆撃という「国家テロ」を正当化し、国家の主権、民族の自決を踏みにじるむき出しの力の政策をもって、反帝国主義勢力、諸国の一掃をはかろうとしていました。L I Cとよばれるこの戦略は、C I Aによる反革命勢力の育成と支援による各国への転覆活動の拡大と一体のものとして進められました。

この情勢は、ますます、反帝勢力の相互支援、共同を要求し、また、これまでのような武装闘争のたたかひの転換を要求しました。国際主義のたたかひの一環として担ってきた経験においても、その能力においても、各国の反帝勢力を支援する位置からのたたかひがわたしたちに求められ、わたしたちの国際主義は、その要求に応えることにありました。

それが、アメリカ帝国主義が、さまざまなデッチ上げの口実をもって、わたしたちの組織的な壊滅のために、日本警察以上に攻撃的な体制をもって臨む根拠となっています。

このたたかひの中で切実に問われていたことは、日本の人民のたたかひの前進とそれとの結合でした。真の意味で各国の反帝勢力を支援し、国際主義の物質的な力となるのは日本人民のたたかひです。わたしたちは、それを結びつけていくことが問われました。

五

国際情勢全体においては、帝国主義によるゴルバチョフの政策の利用によって、東欧の崩壊、さらには、ソ連の崩壊とゴルバチョフ自身の失脚を導きました。さらに、湾岸戦争は、アメリカ帝国主義の一元的な支配としての「新世界秩序」を示すものとしてあり、第三世界、とりわけ、パレスチナ革命を含む、人民のたたかひに困難をもたらしました。

わたしたちは、東欧、ソ連の崩壊のプロセスを通して、新たな教訓を得ることができました。第一には、ソ連、東欧の存在が、その中身が社会主義として正しくなかったとしても、反帝国際戦線での大きな役割をもち、それに反対する勢力をもふくめて、どれだけ支えられていたかということが改めて明確になったことです。この崩壊は、帝国主義本国の革命主体であるわたしたちの革命勝利が遅れていることにもっとも原因があることを主体的にとらえることを要求していました。ソ連、東欧が社会主義として正しく発展しなかったのは、社会主義を実現する物質基盤と労働者階級をもつ帝国主義本国の革命との結合がなかったからであり、そのことをわたしたちの自己批判として踏まえなければなりません。

第二には、ソ連、東欧の崩壊の内的根拠は、プロレタリア独裁としてのソビエト権力が党独裁にとつてかわられてしまっていたことです。社会主義諸国の人民にとつて、党独裁は徹底した民主主義の実現をはかるソビエト権力ではなく、抑圧となっていたことです。しかし、このことも、党独裁を一般的に否定するのではなく、ソビエト権力が党独裁にとつて変わられなければならない根拠からとらえなければ、ブルジョアジーと同じ社会主義そのものの否定になります。その根拠としてあるのは、主体的には、無謬の党観の問題です。この観点からとらえれば、党独裁とプロレタリア独裁とは矛盾しないものとなります。また、そこから批判者、異端者の排除と抑圧の構造がつくられることになっていました。客観条件としては、ヨーロッパの遅れた帝国主義としてのロシアの社会発展段階に大きく規定されていたことを見ない訳にできません。労働者階級が社会の少数派であることから、党の独裁による統合が行われ、それが転換されず

にきていたということです。

第三には、中央集権的計画経済の問題です。社会主義諸国の人民にとつて、経済的な発展の立ち遅れと生活の困難が資本主義への幻想を育てたことがソ連、東欧の崩壊の根拠のひとつとしてあります。社会主義の根本的な考え方は、生産と労働の社会化と私的所有の矛盾を止揚し、所有の社会化を行い、生産と労働を解放することにあります。また、計画経済は、資本主義の無政府の経済の発展による人民の生活の

不安定、不確かさを解決するというものでした。それと国有化、中央集権的計画経済がイコールのものではありません。この点もなぜそのようになったかを根拠から考えてみる必要があります。主体的には無諤の党観が党の指導の観点となっていて、中央集権的な経済がつくられました。そして、それは、各企業、生産点の創意を第一に置くよりも、党の指導を第一におくようになったということです。客観的な条件も同じように、工業化が必要であったロシアにおいて、初期段階では上からの工業化が必要であったということとです。ところが、その転換が行われず、崩壊に至るまで同じように行われてきたということです。現在の問題をつくりました。社会主義の考え方からすれば、より人民が主権者となる経済を確立することであり、人民の意志から離れた強大な中央集権的な経済は、それを阻害するものであるということです。

第四には、民族問題の未解決の問題です。自発的な諸民族の融合をもたらずのものであったはずのソビエト連邦が、諸民族を抑圧するものとなっていたことが、東欧、ソ連の崩壊後の民族対立の拡大を生み出しています。レーニンの民族自決の承認と自発的な民族融合へ導くという原則とは反対に、抑圧的な方法で統合が強制された結果としてあります。この根本にも無諤の党観が存在します。党が正しいことを要求することが第一とされてしまい、「どのような正しいことでも、抑圧民族の側から押しつけられるものは、被抑圧民族にとって抑圧でしかない」という真理が忘れられていました。抑圧民族と被抑圧民族の分離と被抑圧民族の自決によって、対等の関係をつくり、その中でそれぞれの民族の内部から融合への要求をつくりだせるようにしなければなりません。それは、対等の側から、諸民族が同質化への自主的な発展がつけられないければなりません。もう一つの根拠は、一国社会主義の建設を強制されたロシアに対する帝国主義の干渉と包囲が、一挙的な連邦への統合へと進めさせているということが言えます。

以上の教訓から、わたしたちは、社会主義建設において、党が権力を握ることを自己目的にせず、人民自身の権力を下から支える役割を果たさなければならないこと、より人民自身が国家と社会の主権者となるためには、中央集権的な国家ではなく、民主主義の徹底として住民自治を基礎におく社会とならなければならないことをとらえ返しました。第二には、経済の発展もまた、中央集権的になされるのではなく、一定の生産力の発展を基盤として、住民自治を基本とした経済をつくることであり、また、計画的な経済は、自主的な経済単位の調整と、その統合的な発展の方向を導く以上のものではないことをとらえ返しました。第三には、民族問題は、民族自決権の承認と抑圧民族の自己犠牲のなかで、対等、平等の立場から社会、経済的な同質化を相互支援する関係の中で解決されなければならないとらえ返しました。さらに、その根本は、各国の指導党の対等、平等を前提とした同質化の進行の中でかちとられなければならないことです。

これらは、わたしたちが日本の新しい社会を考えていく上での重要な教訓です。ソ連、東欧の崩壊の中で、国際反帝勢力のたたかい、戦線の再構築にとって、もっとも重要なことは、帝国主義本国内の革命の立ち遅れを克服し、第三世界の解放闘争と結合することにあります。とりわけ、日本革命の位置がますます重要になっています。生き残りをかけてたたかっている社会主義諸国を批判することは簡単ですが、問われていることは、わたしたち自身の革命を発展させることです。

国際情勢は、反帝勢力にとって不利な条件にあります。しかし、人民のたたかいはさまざまなかたちで発展しており、東欧、旧ソ連の人民も、現在の資本主義化のための混乱のなかで、新たな社会主義の価値を見いだすことになるでしょう。そして、アメリカのロスアンジュルスでの暴動に見られるように、人々は資本主義によって満たされている訳ではありません。そうした新たな社会をもとめる人民の息吹こそが革命の根本的な力であり、わたしたちの確信でもあります。

わたしたちのたたかいたいも、情勢を切り開く中で、こうした新しい息吹との結びつきをつよめることができるでしょう。それこそが二一世紀を切り開くたたかいです。

日本の人民、同志、友人のみなさん！

わたしたちは、リッダ闘争二〇周年に際して、ともに二二世紀に向かって、人民革命勝利の時代を切りひらいていくことを呼びかけます。

第一に、最後の党をともにつくりよう。

無謬の党観に立脚するのではなく、人民原理に立脚し、党の役割をはたし抜く党をともにつくりあげよう。党が分裂や対立の根拠となるのではなく、人民の生きるためのたたかいを支援し、その勝利のために、自らをたえず革命し、その役割を果たす党をつくりあげよう。現在の国内、国際情勢の中でますます党こそが問われています。

第二に、日本の人民革命を勝利させるたたかいの統一をつくりあげよう。

アメリカ帝国主義と日本独占資本の支配に反対するすべての人々は、力をあわせて、共にたたかおう。現在の情勢は、社会党まで含めて支配階級による再編の中で取り込まれ、共産党は、人民のたたかいの統一よりも分裂をつくりだす旧来の価値観にたっています。アメリカ帝国主義と日本独占の支配にたいする人民の自治と共生をもとめるたたかいは広がりながら、そのたたかいを一つにすることができていません。人民の統一した力こそが社会を変革します。分裂したり、対立したりする理由は無数にあります。しかし、現在の社会を変革するためにたたかいを一つにすることが重要です。

第三に、陣地戦をたたかい、民主主義を実現しよう。

地域での人民のたたかいがさまざまに発展していると思います。地域のなかでの住民自治と共生の実践の拡大を通して、人民の陣地をつくりあげよう。あらゆるところで自治と共生の実践は、新たな社会を準備します。

そのたたかいを多くの地域に拡大することこそ、人民の陣地の拡大となります。人民が主体となり、また、共に生きるためにどうすればよいのかを考え、行動し、総括する中でそれを発展させることができます。

第四に、帝国主義とたたかい、国際主義を実践しよう。

現在の国際情勢の中で日本の動向が大きな鍵を握っています。アメリカ帝国主義や「大國日本」を追求する日本独占資本の利益を実現し、防衛しようとする自民党政府の「国際貢献」やPKO・自衛隊派兵策動とたたかい、米軍基地をなくし、真の反戦平和と非同盟自主と各国人民との国際連帯を実現していく日本人民と党のたたかいは国際的に決定的な重要性を持っています。

わたしたちは、自らの持ち場で、人民革命の最後の勝利まで、リッダ戦士たちの遺志を引き継ぎ、自己犠牲精神をもって国際主義の実践をし、人民と共に前進する決意です。人民の当たり前の生活の中にたたかいの根拠があり、人民の生きようとすする意志がたたかいを創り出します。その確信さえあれば、ブルジョアジーや御用学者が「社会主義は負けた、たたかいを放棄しろ」という言葉にまどわされることはありません。敗北や失敗は恐れることはありません。その中から教訓をつかみとり、わたしたち自身を革命し、前進することができからです。

わたしたちの合言葉は、常に「難局を勝利の土台へ」です。これがわたしたちの二〇年間のたたかいの確信です。

日本人、同志、友人のみなさん！ 獄中の同志たち！

共に！